

? 経営革新とは?

中小企業新事業活動促進法に基づいて、『新規性』『独自性』『成長性』『実現性』が認められる中小企業の新たな取組に対し、都道府県知事が認定する制度です。事業所自身が【経営革新計画書】を作成し、審査会でプレゼンを行うため、自社の営業力強化に効果的。国の優遇措置や融資の面においても効果を発揮します。

経営革新

オーダーメイド寝具 製作・販売及び 眠りコーディネートによる 快眠商品の販売



富久屋

事業主 土井 章広

「跡取り」から 事業主への急展開

店に入ると、「こんにちはー！」と笑顔で出迎えてくれる。この日常的な柔らかい雰囲気漂う店を運営しているのは、土井章広さん（33歳）だ。祖父の代に呉服店として創業し、父の代で寝具の製造・販売を始め、地元の布団屋さんとして根付いてきた。土井さんは21歳の時に東京蒲田技術学院で布団職人としての修業を始めた。一級寝具製作技能士となった29歳の時、転職が訪れる。父親が亡くなり、土井さんにこの店が任されることになったのだ。祖父の代から続く「富久屋」の三代目としてやっていけるのか、仕事に対する責任感から不安が大きくなっていく中、土井さんの目に止まったのが経営革新だった。

お客様目線に立った 商品づくりを心掛ける

土井さんが最初に経営革新に持ったイメージは『難しそう』。アドバイザーの先生に、「なぜ木綿を使うのか?」「なぜこの素材なのか?」などと質問され、考え込むこと



均一に敷き詰めた木綿の上に薄く延ばした真綿をかぶせる

もあった。そこで土井さんは、布団に使う素材の特性について改めて広く深く学んでいった。その結果、自分の作る寝具の素材の良さを再発見し、職人としての自分に自信をもった。そして商品開発に意欲を燃やしていた時、「その商品はお客様が求めているものですか?」

と言われ、ハツとした。「僕が『良い』と思うものを作ればお客様も喜んでくれると思っていたけれど、そうじゃないということに気付いたんです。今は、お客様に『これが一番』と思ってもらえる商品を作る、という考え方に変わりましたね」土井さんは照れ臭そうに当時は振り返った。

経営革新で見つけた 自分らしい経営

和布団によく使われる木綿には重いという短所がある。そこ

で重い木綿と軽い真綿を二重のシート状に重ねて加工。軽さと保温性を兼ね備えた『ハイブリッド和布団』が経営革新の柱だ。お客様の好みに合わせるため、オーダーメイドで制作・販売している。今後は布団だけでなく、お客様の睡眠環境を総合的にサポートする『眠りのコンシェルジュ』としてのサービス提供を目指している。

経営革新を取得するまでの過程で、自分自身や商品、環境について見つめ直すことができ、『自分らしい経営』に取り組み始めることができた。

「スタート地点に立ったばかりですけど、先は広く見えているので、これからが楽しみです」強く語る瞳は輝き、未来をしっかり見据えている。

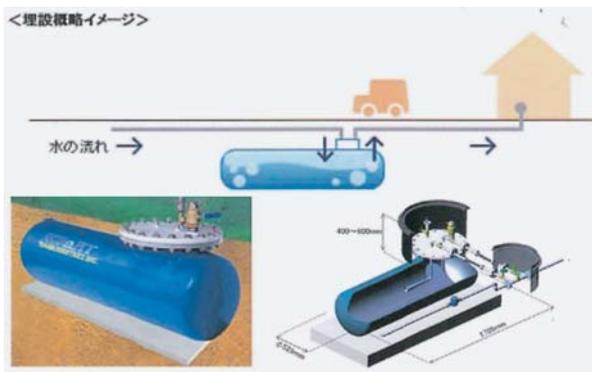
(山崎 晃稔)



阪神淡路大震災で再認識 企業の社会貢献追求

株式会社出雲建設は公共事業・工場・店舗等の建設事業と、ビル建設用の鉄鋼事業が中心だったが、平成12年から地下防火水槽事業に取り組み始めた。そこには、出雲社長の社会貢献に対する強い想いがあった。

従来の地下防火水槽はコンクリート製が主流で、耐震性に問題があった。阪神淡路大震災の時、ガソリンスタンドの鋼製地下タンクに被害がなかったことに着目した出雲社長は、自社の



溶接技術を生かして鋼製地下防火水槽を開発した。

出雲社長には次の課題があった。震災時、飲料水が不足して多くの人が困った経験から、防火用水を飲料用に転用できないかと考えたのである。

貯蔵し続ける地下タンクの水は、飲料水に適さない。そこで、タンクに水道管を繋げて水を循環させ、通常は水道水として、震災などで水道管が使用できない時には非常用の飲料水兼防火用水として利用できるようにした。この『耐震性飲料水兼用防火水槽』で経営革新を取得した。

地域・業種を超えた 企業の連携の大切さ

地下防火水槽事業は、業界や市場の動向についての情報を共有している企業の社長との話し合いから生まれ、共同開発した。鉄鋼事業には全国的なネットワークがある。一方、建設事業は経営安定のために、広い営業エリアを常に必要としている。これが上手く噛み合った。

「これからは企業連携が大事です。新商品や新分野の開発には、様々な情報や発想力が不可欠ですから。そのために、同業者だけでなく異業者とのコミュ

ニケーションを積極的にとっていくことが大切なんです」と出雲社長は語る。

企業の未来を創り出す 人材の育成

実は今回、経営革新計画の実務は年若い課長が担当したという。出雲社長の人財育成への思いは強い。

「お客様の要望はどんどん変わってきています。それに応えていくには、広い視野が必要です。日常業務を繰り返していたのでは視野が広がらないですから。何より大切なのは挑戦すること。その経験は、本人にとっても会社にとっても財産になります。それに、うちの業種は人前で話すことが苦手な人が多いのですが、プレゼンで自分の思いを人に伝える経験は、本人の自信につながると思うんです」

経営革新への取組は、社員の意識改革の一端でもあったのだ。経営品質の向上には人材育成が欠かせない。

「結果も大切ですが、取り組み過程が重要なんです。社員達には様々な経験を積んでもらいたい、紆余曲折しながらも成長してくれることを願っています」

(岡野 雅年)

水道管に直結！ 飲料水・防火用水兼用の 鋼製地下タンクの製造

株式会社 出雲建設

代表取締役社長 出雲 津芳

経営革新



8月20日より今年度の「経営革新塾」がスタート。ぜひチャレンジしてください！